

能楽研究所五十年の歩み : 創設五十周年記念行事を終えて

西野, 春雄

(出版者 / Publisher)

法政大学能楽研究所 / The Nogami Memorial Noh Theatre Research Institute of Hosei University

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Nogaku kenkyu : Journal of the Institute of Nogaku Studies / 能楽研究 : 能楽研究所紀要

(巻 / Volume)

28

(開始ページ / Start Page)

83

(終了ページ / End Page)

91

(発行年 / Year)

2004-04-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002846>

能楽研究所五十年の歩み

— 創設五十周年記念行事を終えて —

西野春雄

野上記念法政大学能楽研究所は、二〇〇二年四月、創設五十周年を迎えた。各種の記念事業や行事も、学内外の関係機関のご協力・ご支援を得て、滞りなく実施することができた。関係各位に対し、この場をお借りして篤く御礼申し上げる。以下、五十年の歩みを略述するかたちで、研究所のこれまでの主な活動と五十周年記念事業や行事について、その概要をご報告申し上げます。

1 創設前後のこと

漱石門下の逸材で英文学者の野上豊一郎博士（一八八三—一九五〇）は、一九〇九年（明治四二）法政大学就任以来、予科長・学監などの要職を歴任した。そして一九四六年二月学長に選ばれ、翌年三月に総長に就任し、戦後の復興と教学改革に尽力し、一九五〇年二月、病いのため現職のまま急逝するまで、法政大学の発展に心血を注いだ。

博士は専攻する英文学方面に数々の業績をあげるとともに、高浜虚子に誘われて青年時代に出会った能楽に感銘を受け、

爾来、研究対象をほとんど能楽に絞り、ギリシア劇からシェイクスピアやバーナード・ショウまで、西洋演劇に精しい立場から、斬新な視点で独創的な研究を次々と発表し、能楽研究に新分野を開拓した。師の漱石と同じくワキ方下掛室生流の謡を嗜むかたわら、新時代の能楽の在り方に心を配り、その啓蒙と普及に力を尽くすとともに、海外への紹介にも熱心な実践家でもあった。一九三八年（昭和一三）外務省から欧米諸大学へ派遣されたのも能楽に関する講義のためであった。夫人は作家の野上弥生子氏である。

総長就任後、あらゆる方面から能楽という日本の貴重な文化財に学的検討を加えようという構想のもとに、まず文学部内に能楽研究室を設け、一九四八年、能楽研究家の田中允氏（当時三十四歳）を文学部助教として招き、資料の蒐集と調査にあたらせていたが、その業が軌道に乗らないうちに病没したのであった。享年六十七。

しかし、博士の志は大内兵衛総長ら理事会により継承され、学内外における博士の功績を記念する事業として能楽研究所

の設立を決定し、能楽研究の発展と能楽の振興に寄与することを目的として、一九五二年四月、我が国初の能楽研究所が誕生したのである。

当時の研究所のスタッフは、前図書館長で野上総長と親しかった井本健作文学部教授(筆名・青木健作)が所長に就任し、美学の立場から能楽論にも関心の深い文学部長の谷川徹三教授、世阿弥能楽論研究で著名な西尾実文学部教授、狂言研究の第一人者の古川久東京女子大学教授、番外曲の博搜で知られる田中允助教授が所員、専任研究助手が表章氏、専任事務職が伊藤千里氏であった。また顧問として、有識者の安倍能成・小宮豊隆・野上弥生子・野々村成三・能勢朝次の五氏が就任した。場所は、第一校舎前の研究室棟2階の一室であった。

2 資料蒐集と研究・調査活動

設立趣意書に、能楽研究所の創設は「新日本建設に一つの礎石を築」き「世界の文化に日本人の立場から貢献」し、「ひろく世界の要望にも答へるもので、これはただに故人の徳を顕彰することであるばかりでなく、本大学の存在にも一つの意義を加へるもの」と謳っている。戦後の新時代の風を感じさせる文言であるが、今まさに能楽は世界の無形文化遺産として注目されており、設立当時の国際情勢を考える時、いちはやく「世界の中の能楽」を見据えた宣言というべきであろう。大学財政の苦しい時代にもかかわらず、決断された

先人たちの先見の明に、深い感謝の念を捧げるものである。

一九五三年四月、五三年館(大学院棟)が落成し、五一一号室に移転。広さは書庫と兼用で三四平方メートルとかなり狭い。翌年三月、井本所長が退職し、後任に谷川徹三文学部長が就任。同年七月には、井本所長退職記念一蔵書目録附解題(表章編)を刊行した。当時の蔵書は約三千冊。なお、一九五五年四月、理事会は「能楽研究所規定」を改定し、文学部付置の研究所に改め、文学部長が能楽研究所の所長を兼務する形が続いた。しかし、一九八八年四月、文学部付置を離れ、他の研究所と同じく独立の研究所となり、今日に至っている。

設立趣意書に示された当面の事業計画は次ごとくであった。

一 研究上の計画

世阿弥事典・能楽事典の編纂、能楽資料叢書の刊行、廃曲を網羅した謡曲全集の刊行、狂言本文の刊行、能楽関係文献総合目録の編纂。

二 資料上の計画

イ 文献的資料の蒐集(能楽に関する古写本・古版本・図録・写真・内外活版本・その他)
 ロ 演出上の資料の蒐集(能楽に関する面・装束・楽器・その他)。

三 普及上の計画

演能会・講演会の開催、新様式能の試演。
 実に広範囲にわたっているが、真つ先に取り組み最も力を

注いだのが、研究の基礎となる文献資料の蒐集と、全国各地の諸家・諸機関が所蔵する能楽資料の調査・撮影、および写真による収集である。爾来、篤志の方々からのご寄贈、関係機関のご支援、大学当局の理解を得て、北は北海道から南は九州まで、能楽資料の調査を続け、資料の蒐集整備と充実に努めた結果、蔵書は現在、約四万冊を数え、質量ともに他に類を見ぬものとなった。

能楽資料の調査と写真による蒐集の成果は著しく、閲覧者は居ながらにして古今諸流の謡本・狂言本、室町から現代までの能楽伝書や史料、番組・雑誌などを調べることができ、一方、主として表所員が中心となって進めた調査が機縁となつて、購入の形では到底入手不可能な、まともな能楽資料の寄贈や寄託も相次いだ。なかでも特筆すべきは、宝生流謡本をはじめ能楽図書出版の老舗わんや書店主で、一九五七年から研究所の顧問であつた江島伊兵衛氏（一八九五—一九七五）のコレクション「鴻山文庫」の寄贈である。江島氏没後の一九七六年、古今の能楽資料約一万点を越える当代無比の蔵書が、ご遺族のご高配により本学に寄贈されたのである。一九七七年十月には「鴻山文庫」受贈と、創設二十五周年を記念して「能楽資料展」（及び講演会）を開催し、研究所の蔵書資料の充実ぶりを学内外の方々に見ていただいた。

また、寄託されていた奈良宝山寺藏金春家田伝文書「般若窟文庫」（約二千点）が一九八一年六月に松本実道管長の格別のご配慮で譲渡された。同じく寄託されていた、小鼓観世家

の後裔で千歳市在住の服部康治氏ご所蔵の小鼓観世家来文書「観世新九郎家文庫」（約七百点）も一九八八年三月に寄贈を受け、研究所の蔵書は格段に充実することができた。

研究所では、設立当初から流派を超えた公的研究機関としての役割と機能を果たすべく活動している。一九六六年（昭和四十二）十二月に発足した「能楽懇談会」（初代代表・古川久所員）の事務局が研究所内に置かれたのもそれを物語る一例である。この精神は、専任が所員二名・事務職一名（ほかに兼任所員三、四名、運営委員四名）という少数のスタッフながら現在も堅持しており、常に資料公開の精神を貫き、開かれた研究所を目指している。所員はまた学部や大学院の授業も担当し、教育面にも力を注ぐとともに、研究所主催の研究会を開き、若手研究者の育成や後進の指導にも努めている。

3 能楽資料集成と紀要の発行、社会への貢献

ところで、一九六〇年代半ばから七〇年代初頭にかけて大学紛争が激化し、本学も紛争の混乱が続いた。私事で恐縮ながら、筆者が文学部の専任助手に採用され研究所に勤務したのが一九七〇年である。翌年、研究所創設と基礎固めに尽力した田中允所員が退職し青山学院大学へ教授として着任した。筆者はその後任として専任所員（文学部専任講師）となったが、当時は紛争が激しく、研究所の職務遂行もままならぬ状態にあった。そこで、一部の貴重蔵書を麻布校舎に避難させ、大学付近のアパートで仕事を進めざるを得ない日々が続いたが、

一九七二年十二月の暮れ近く、全面移転を決断し実行。現在と違い、陸の孤島と言われた麻布校舎は交通不便で、隔絶された感はぬぐえなかつたが、大学院棟当時の五倍の広さを確保することができ、これまで以上に幅広い事業を展開することができたのは幸いであつた。当時の蔵書は約二万冊。

一九七二年には創設二十周年を記念して朝日講堂で「能の講演と映画の夕」を開催し、野上博士監修・昭和十年制作の「能の初のトークー」(葵上)〔英語版。鉄道省観光局制作。桜間金太郎・宝生新ほか〕を上映した。このフィルムの行方を探索する仕事が筆者の担当で、あちこち尋ね、京橋の近代フィルムセンターに所蔵されていることを教えてもらい、追力満点のフィルムを所員で試写した時の感激は今に忘れない。翌一九七三年三月には、創立二十周年記念事業の一環として「能楽資料集成」(わんや書店・第一期二十冊)を創刊した。能楽研究所が進めて来た資料蒐集と調査研究の成果を公開し、その活用を願つて、未刊・稀覯の貴重資料を翻印または影印で提供するものである。誠に遅い歩みながら、近く完結の予定であるが、学界・能界に提供したい資料は数多く、将来、新構想のもとに第二期に着手できればと考えている。

他方、一九七四年には宿願の紀要「能楽研究」を創刊した。蒐集資料の紹介など研究所の事業報告と所員の研究成果の発表とを柱に、能界・学界の動向を研究所の立場から概観した研究展望・能界展望も加えている。本年三月で第二十八号を発行することになるが、創刊号に香西精頼問の「観阿弥生国

論再検」を掲載したように、所員以外の研究者にも寄稿を願ひ、誌面の充実に努めている。

寿夫賞・催花賞

紀要を創刊した一九七四年の十二月に、能をめぐる初の国際シンポジウム(世界の中の能)が本学で開かれ、後日、報告書「世界の中の能」を法政大学出版局から出した。最終日には同年六月に設定された「観世寿夫記念法政大学能楽賞」の第一回授賞式が行われた。これは、世阿弥の花の思想を体現し能とは何かを問い続けつづ一九七三年十二月、惜しくも五十三歳で急逝した観世寿夫氏の能界・劇界における業績を記念して、ご遺族からのご寄付等に基づいて本学が設定したものである。顕著な業績や舞台成果を示した演者、研究者・評論家、能楽の普及に貢献した個人・団体に贈られ、毎年命日の清雪忌に発表している。二〇〇三年度で二十五回を迎えた。また前述したように一九八七年三月、寄託されていた「観世新九郎家文庫」を服部康治氏より受贈し、翌四月、服部記念法政大学能楽振興基金が設定され「催花賞」が発足した。観世新九郎家の先祖で能の作者として名高い観世小次郎信光の技芸を明国の人が揮毫した「催花」の額が、服部家に家宝として伝来しているのに因んだ名称である。地方在住の能楽囃子方等の功労者を顕彰している(後に狂言方・ワキ方・制作にも広げた)。二〇〇三年度で十五回を数える。二つの賞とも年々その評価が高くなっており、これらの選考実

務も能楽研究所の仕事のひとつである。

4 富士見キャンパスへの再移転

今日まで半世紀にわたる能楽研究所の軌跡は、大学の歩みと重なる。先にも述べたように大学紛争が全国に波及した七〇年代前半は、混乱を避けて一九七一年二月末から一九八〇年三月まで麻布三の橋の麻布校舎に移転するなど苦しい体験もあるが、そうした困難も所員の努力で乗り越えてきた。麻布時代も蔵書の充実と研究の発展に努めたが、一九八〇年四月には富士見キャンパスの八十年館へ再移転し、さらに充実した活動を展開することができた。

資料公開の精神を堅持し、能楽の総合的研究機関として、微力ながらも、調査・研究、能界への貢献に努めている。研究者や学生や愛好者にまじって能楽師の方々も閲覧に見え、演出研究や舞台活動に役立てていることも特筆すべきであろう。近年は、海外からの研究者の来訪もあいつぎ、外国の研究者にとって、能楽研究所は最適の環境となっているようである。

試演能ほか

一九八二年十月には、創設三十周年を記念して、教職員と家族対象の初の能楽鑑賞会「浅見真州主演（清経）ほか」と、一般にも公開した第一回試演能「世阿弥本による（雲林院）（主演・観世鏡之亟ほか）を復曲上演した。研究者と演

者との共同作業で進めたもので、これ以後、能界では復曲活動が盛んになったが、この試演能が先駆けとなった形である。以後、「古演出による（葵上）」（主演・浅見真州）、狂言（鷲）（出演・野村万之丞（現・萬）、茂山千五郎（現・千作）、一噌仙幸）の復曲と、木下順二作（彦市ばなし）を新演出による試演を行った（出演・野村万作、野村万之丞（現・萬）、野村武司（現・萬齋）ほか）。

一九九二年六月には、創設四十周年記念能として、人氣曲（道成寺）の原曲（鐘巻）を復曲して評判を呼んだ（出演・浅見真州、宝生閑、観世鏡之亟ほか）。この時は会場の国立能楽堂と共催して「能楽文献資料展」も行い、予想を越える来観者のため目録を増刷したほどであった。

一方、一九八五年度から三年計画で鴻山文庫蔵江島伊兵衛氏撮影の16ミリフィルム「名家の面影」を日本私学振興財団の学術研究補助金を受けて再生事業に取り組み、一九八八年二月に完成、同月に国立能楽堂で、四月に学内で、試写会を開催した。同年四月、前述のように、文学部付置から独立の研究所に制度が変更され、所長は研究所の運営委員会で選出するかたちとなった。

一九九三年十月には、創設以来四十年のこうした活動が認められ、財団法人ボークラ伝統文化財団より「日本唯一の能楽研究所として永年にわたり能楽研究に従事し優れた成果をあげるとともに、能楽の現場に積極的に生かす活動を行い、能界の活性化に大きな役割を果たし」「我が国伝統文化の存続

と発展に多大の貢献をしたとして、第十三回ポーラ文化特賞を受賞した。

5 ポアンナード・タワーへの移転

一九九五年夏からは、大学を日常的に社会に開かれた形で、知的な世界で市民に寄与したいという趣旨の（開かれた法政21）の精神に則り、広く市民を対象とした公開講座「法政大・学能楽セミナー」を大学院と共催し、今も継続している（一九九九年からエクステンション・カレッジも加わる）。テーマは第一回「能楽戦後五十年」、第二回「式楽への道のり」、第三回「手紙や日記が語る能・狂言」、第四回「能楽百年」、二十一世紀への贈り物」、第五回「能のデザインを考える」、第六回「風姿花伝六百年 世阿弥に学ぶ」で、講師陣に人を得、毎年、百名余の受講者が熱心に聴講している。

またエクステンション・カレッジへ協力して一九九六年から開講した初心者向けの「能楽講座」も回を重ねている。能楽セミナーが専門課程なら、こちらは教養課程にあたるもので、二つとも、それぞれ人気を博している。

二〇〇〇年三月には竣工なった高層ビルのポアンナード・タワーの23階に移転した。前年から移転作業の準備に着手したが、約半世紀の間に蒐集に努めた蔵書は膨大で、かつ鴻山文庫・観世新九郎家文庫・般若窟文庫・三宅文庫・楠川文庫・鷲流狂言水野文庫・古川文庫・香西文庫・野上文庫・丸岡文庫・笹野文庫・横道文庫の各種文庫に加え、徳川宗敬氏

寄贈「文化七年一橋家刊『宝生流舞囃附仕舞謡』」の表紙を含む全丁の版木、神林家寄贈金剛右京遺愛の長刀ほか能楽図書、諸井恒平氏旧蔵宝生流謡本ほか能楽資料、田中トク氏寄贈京観世井上家ならびに田中家能楽資料、後藤紳介氏旧蔵能楽関係雑誌ほか、倉田喜弘氏寄贈近代能楽史資料ほか多数の資料もあり、移転作業は大変であったが、事務囑託や大学院生諸君の協力を得て、終了することができた。明るく見晴らしのいい環境で、書庫を含む全体の面積四四二平方メートルは、創設当初の十倍強の広さである。

また、26階のスカイホールには組立式の開放的な能舞台もでき（ステージの上ではなく床面に組立てる形。鏡板は屏風仕立て。観客席二二〇）、四月に竣工記念能に（翁）（友枝昭世・山本東次郎ほか）と（羽衣）（友枝昭世・宝生閑ほか）を上演し、大学あげてその竣工を祝った。なお、その後、工学部武者英二教授とゼミ生諸君による「能舞台」の二十分の一の模型が完成し、ガラスのケースに収めてある。

移転後も蔵書の寄贈や譲渡が相次いだ。初代所長井本健作および井本農一氏旧蔵謡本ほか能楽資料、槍常太郎氏旧蔵能楽資料（三役養成会関係資料も含む）、研究所創設と基礎固めに尽力された田中允氏からは番外曲関係資料ほかの能楽図書資料の、観世流シテ方の河村隆司氏からは古今諸流の謡本をはじめとする膨大な能楽資料の譲渡・寄贈があった。

また、創設五十周年を記念して中藤健三氏からは岳父である能画家飯塚正賢氏旧蔵「能御絵巻」二帖（伝狩野春湖筆）の

寄託を受けるとともに飯塚氏の能面や能面図巻も受贈した。能面作家岸本雅之氏からは能面「小面」の寄贈を受け、江島喜和子氏から江島伊兵衛氏の肖像写真の寄贈を受けた。金春安明氏からは、番外謡曲を集成した江戸期謡本の寄託を受けた。

6 五十周年記念事業

二〇〇二年の創設五十周年記念には、関係機関のご支援ご協力を得て、次の記念事業・行事を行った。

A 能楽セミナー「能楽の源流を探る」(全六日間。七月) 大陸伝来の伎楽や舞楽、寺院の声明、民衆を熱狂させた歌や舞など、能楽に流れ込んだ様々な芸能をとりあげ、能楽誕生までの歴史を探る企画である。講師と題目は芝祐靖氏「楽劇の濫觴」、ステイヴン・ネルソン氏「声明の響き、語りへの道」、蒲生美津子氏「早歌のリズム」、馬場光子氏「今様の歌声」、田口和夫氏「田楽・猿楽の熱狂」、金春安明氏・西野春雄「翁猿楽の祈り」であった。多彩な講師陣と興味深いテーマで、充実した講座が実現した。受講者延べ四八〇名。

B 記念展示「能楽資料の美」(前期〇七月二日〇十九日。後期〇十月一日〇十九日)。

研究所が所蔵する室町から近代までの能楽資料の中から、美術的価値の高いものを厳選し、金春禪竹写「日記・人形・口伝」、下間少進筆「童舞抄」「舞台之図」、「光悦謡本」、「弘化勸進能興行絵巻」、飯塚正賢氏旧蔵「能御絵鑑」など、六

十点を展示した。会場はポアソナード・タワー14階の博物館展示室。資格課程コースとの共催で、準備には博物館学芸員実習の一環として学生諸君が協力した。この方式は今後のモデルになるものと思う。来訪者約千六百名。本展示については、主担当の岩崎雅彦所員による報告(パネルの文章と展示目録)を本誌前号に掲載した。

C 記念出版。野上豊一郎著「太郎冠者・山伏行状記」(能

楽研究所編・楡書店刊。四六判二〇八頁。一三〇〇円) 二〇〇一年六月に野上家から寄贈された資料の中から五十年ぶりに発見された野上博士の未発表原稿「山伏行状記」と日本叢書「太郎冠者行状」(生活社・一九四五年)ほかを中心にまとめた狂言随想で、狂言に登場する太郎冠者と山伏像に注目したユニークな入門書でもある。十月刊。出版をご快諾下さった野上耀三氏と、出版を引き受けて下さった楡書店に対し篤く御礼申し上げます。解説は橋本朝生所員が担当した。

D 記念頒布。法政大学鴻山文庫蔵16ミリフィルム「名家の面影」のVHS化。

鴻山文庫主人江島伊兵衛氏が昭和七〇九年にかけて撮影した最古の映像(サイレント)で、断片ながら、初世梅若方三郎・松本長・野口兼資・先代桜間金太郎・金剛石京・先代喜多六平太・先々代観世左近・宝生新など、近代の黄金時代を築いた名手たちの至芸を収める貴重なフィルム。研究所では、前述のように、このフィルムを現代に再生して記録の保存を図るとともに研究資料として役立つことを願い、一九八八年、

新たに謡を吹き込むなどして二時間の映像に編集したもので、当時からVHS化の要望が寄せられていた。今回、創設五十周年を記念してVHS化に踏み切り頒布した(十月十日)。頒価・八〇〇〇円。解説は西野春雄が担当した。

*幸いに本もビデオも共に好評で(特にビデオは完売し追加した)、研究所でも扱っており、ご希望の方はお申し込みいただきたい。

E 記念能。新作能《草枕》の上演(十一月十五日)。

制作＝能楽研究所・鍬仙会。文学部と共催。

これまでの試演能では復曲を手掛けてきたが、今回は現代における新作能の可能性を追及すべく、新作能を試みた。

創立八十周年を迎えた文学部も、野上博士をはじめ漱石門下の文学者たちによって築かれたことに鑑み、漱石の新体詩「鬼哭寺の一夜」を基に「草枕」の世界を借りた夢幻能を構想した。旅の詩人(観世鍔之丞と美しい長良乙女の霊(浅見真州)との出会いの物語である。西野春雄作詞、浅見真州作曲・作舞。会場＝スカイホールの特設舞台。二部制。一部二部とも解説(西野)、仕舞(菊慈童)(山本順之、(笠ノ段)(高橋章)、二調(勸進帳(梅若六郎・亀井忠雄)に続いて上演した。会場の都合で招待制とせざるを得なかったが、ぜひ一般公開の機会を設けたいと思う。(草枕)の上演台本など詳細は本誌掲載の別稿をご覧いただきたい。

F 記念事業「世阿弥全集」の再出版

設立趣意書に謳った「世阿弥事典」出版計画はその後「世

阿弥能楽論集」に変更されたものの実現を見ずにいたが、創設五十周年事業として新構想による「世阿弥全集」を計画した。世阿弥の思想や作品を世界にむけて発信したいと考えている。

なおビデオの作成や(草枕)の試演ほか創設五十周年記念事業に対し、有限会社橙青様より多額のご寄付を賜った。そ

7 新たな出版

二〇〇一年五月、能楽はユネスコの「世界の無形文化遺産の傑作の宣言」を受け世界の文化遺産に認定された。中世に生まれ、近世の波に洗われ、激動の近代を乗り越え、今日では世界の人々の共感を生んでいる能楽。初めてこの能楽に触れた外国人たちは、何を感じ、何を発見したのであろう。能に魅せられた外国人たちは、その新鮮なまなざしで能の本質を鋭く指摘し、深く洞察している。かつて野上博士は「新しい目をもって見、新しい頭をもって考えるのでなければ、能の最も本質的なものは捉めない。能の本統に芸術的な研究は、われわれが外国人の目をもって見直し、外国人の頭をもって考え直すところから始まらねばならぬ」(『能の再生』一九三五年・岩波書店)と提言した。

まさに、先人観にとらわれた見方や考え方をしている、新しい研究は進まない。我々は外国人の新鮮な視点や独創的な研究に学ぶ点が多く、それらを踏まえつつ我々の方から発

91 能楽研究所五十年の歩み

信することもまた多い。そうした意味で、二〇〇二年一月、本学が文部科学省の21世紀COE(卓越した研究拠点)プログラムに公募し採択されたテーマ「日本発信の国際日本学の構築」は、能楽研究所のめざす方向と重なる。能楽研究所もその一翼を担い、現在、研究所が主体となって取り組んでいるテーマ「世界の中の能楽」にむけて、調査・研究に着手したところである。

具体的には、たとえば、外国人による能・狂言の翻訳、研究、エッセイや創作の軌跡をたどりながら「外国人の能楽発見と研究」を解明し、あるいは、最良かつ有益な能楽資料を国内外の研究機関や研究者へ発信していく「能楽資料のデジタル化の促進と国際発信」などである。後者では、共同研究の成果の一つである「演能記録データベース」の発信を開始している。

近年は、国内外の美術館や博物館からの出品要請も多く、可能な限り応え、社会への貢献も心掛けている。また海外から研究者の来訪も多く、日本ばかりでなく世界の中の能楽研究の拠点として、能楽研究所はその役割を果たしつつある。今までも外国人研究者を客員所員として受け入れ、所員も外国での研究発表や講演を積極的に行ってきたが、今後は、より活発に交流を深めていきたい。

そのためにも、蔵書の整備を強化して総合的な蔵書目録を、目も早く作成するとともに、創設以来の資料公開の精神を貫き、類縁機関との連携協力も進めながら、研究・調査活動

出版活動、研究的にも意義のある能楽鑑賞会や市民講座・講演会・国際研究集会の開催など、さまざまな形で能楽研究の発展、能楽の振興に貢献したいと思う。関係各位のこれまでのご協力に感謝申しあげ、いっそうのご支援を切にお願い申しあげます。